

## 横須賀を生きる子どもたち

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2017-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: キム, ウンソン メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9958">http://hdl.handle.net/10297/9958</a>

## 横須賀を生きる子どもたち

キム・ウンソン

- 1 文化と子ども
- 2 横須賀色に染まった子どもたち
  - 2.1 祭りの町を生きる子どもたち
  - 2.2 「小祢里」と「縦の関係」
- 3 時代とともに変わる子どもの世界
  - 3.1 「小祢里」の変化
  - 3.2 移りゆく継承の担い手
  - 3.3 今、子どもに求められているもの
- 4 子どもたちに「横須賀」を残すために

### 1 文化と子ども

文化の継承において、子どもは極めて重要な意味を持つ存在である。いうまでもなく、現在横須賀にいる子どもたちの多くは何十年か後の横須賀において文化を継承する担い手になるだろう。今回の調査において、私が横須賀の子どもたちに焦点を当てたのもそれが理由である。

文化の成員である人間のパーソナリティの大部分は、子ども時代に確立することが多い。それでは、何がそうした子どもの個性をつくっているのだろうか。それは、子どもが生きている文化であるといえる。心理人類学者のロバート・ルヴァインは彼の論文「文化の属性—民族誌的見解」において、文化という概念は、個人の発達において役立つだけでなく、必要不可欠ですらあり続けてきたとしている（LeVine 1996）。ここでいう文化とは、共有される観念の組織と定義された概念である。ルヴァインはまた、子どもたちは文化固有の対人関係によって差異が生まれ、このことが生涯にわたって社会的関係での情緒的経験に影響を及ぼす可能性があるとして指摘する（LeVine 1990）。すなわち、その人が生活しているところで共有されている文化が、人間の人格と対人関係の在り方の両方をつくっているということである。

もちろん、はっきりと子どもの目に見える文化だけがその発達に影響するわけではない。子どもの発達に対し、親たちが求めるものもまた文化固有の特徴があり、子どもが育つ環境たる文化を形成するのである（小林 1999）。その例はルヴァインとホワイトによる日本特有の「すなおな子ども観」に関する研究から見つけることができる。この研究によると、

たとえば「すなおな子どもに育てて欲しい」のような育児のゴールを親たち自身がどう考えるかによって、親の子どもへの働きかけという、子どもの社会化の環境が形成されるという（White & Levine 1986）。

以下、第2節と第3節では上で述べたような仮説に基づいて、子どもたちの人格と人間関係を形成するものとしての横須賀の文化と、横須賀に住む親が子どもの発達に対し求めているものについて、フィールドワーク調査を基にした記述をしたいと思う。

## 2 横須賀色に染まった子どもたち

私は、子どもの中でも特に小学生の視点から見た横須賀の文化について調査を行った。ここではまず、その調査から見る事ができた、横須賀独特の文化とされているものについて述べたいと思う。その文化の中でももっとも知名度が高く、横須賀の地域性がよくあらわれているものが、祭りである。

### 2.1 祭りの町を生きる子どもたち

住民たちからはしばしば、横須賀は祭りを中心に回っているという話を聞くことがある。たとえば、正月にも帰省しない横須賀出身の人が4月の「三熊野神社大祭」（以下、大祭）の時には必ず帰ってくるとか、1年中362日は祭りを準備する時間だ、という話などがある。地域外においても、横須賀の祭りを愛してやまない人は数多く存在する。横須賀の稽古場で話を聞く事ができた掛川市の千浜に住むA氏（男性）によると、4月という珍しい時期に開催されて地元の祭りとは被らないこともあり、外部の人であるにも関わらず大祭に強い愛着を持ち毎年参加する人も少なくないという。それくらい、祭りは横須賀にとって欠かすことのできない文化なのである。

このように文化の中心に祭りがあるため、祭りは横須賀の他の様々な文化にも多大な影響を与え、また町の人間関係の構造を形成していると考えられる。そしてそれは決して大人に限った話ではなく、子どもたちもまたこうした祭りの町で育っているのである。たとえば、「横須賀の子どもは赤ん坊の頃から祭りのDVD映像を見させられる」という話は、住民たちの間ではかなり有名である。また、現在小学生と中学生の子どもがいるB氏（女性、40代）によると、宴会などの大人たちの集まりのとき、周りで子どもたちが祭りを真似て祢里に見立てたものを曳く遊びをすることがあり、そのとき使われる小さな祢里のようなものも自分の家にあるという。実際の祭りにも子どもたちは積極的に参加しており、そのための囃子などを大人から教わっている。大祭の稽古は約2ヶ月前から始まり、日曜を除いた毎日、1日2時間くらいあり、子どもたちはそれに自発的に参加しているという話であった。実際に横須賀小学校の小学生たちに聞き取り調査をしてみたところ、話を聞く事ができた11人の子どもたちは全員稽古に参加していることがわかった。稽古に参加する理由は「囃子がうまくなりたから」というものがほとんどで、祭りに積極的に参加す

るという行為そのものに対してはあまりにも当たり前なことという認識があることがうかがえた。

現在の日本では、特に若い世代を中心に個人主義志向が強まり、地域内の繋がりが薄くなっているといわれている。それに加え、学生は生活時間のほとんどを学校で過ごさなくてはならないため、どうしても同年代との人間関係だけが多くなってしまう。横須賀では、こうした稽古のような、町の人びとが集まり一つの目標に向かって協力し合うという活動が、子どもを含む地域の人間関係の形成に大きく貢献しているように思われた。それに、その種の活動には多様な年齢層の人が参加するので、横須賀の祭りは子どもたちと町の大人たちをつなぐ架け橋として機能しているといえるのではないだろうか。

こうした横須賀の地域性は町の学校にもあらわれていた。住民の人からよく聞く横須賀の学校の特徴の中に、「いつも校門が開いている」というものがある。私が直接確認してみたところ、横須賀小学校も横須賀高校もその通りであった。横須賀小学校で教頭を勤める横山靖之氏（男性、51歳）は、「この子どもは町の人びとによって見守られているので、いつも校門は開いたままである」と語る。PTA や子どもの保護者からの反対は特になく、「むしろ町の人はこのことをすばらしいと考えている」という。こうした事例からもうかがえるように、横須賀の学校は子どもと町の大人との強い結びつきによって支えられていると考えられる。



写真 1 三熊野神社大祭の子どもたち（キム撮影）

## 2.2 「小祢里」と「縦の関係」

横須賀には4月の大祭とは別に、子どもたちによる9月の祭りがある。「大祢里」（おおねり）とも呼ばれる大祭に対して「小祢里」（ちいねり）と呼ばれているこの祭りは、時折未就学児童も参加するが、基本的には小学生から中学生までの子どもたちが主体となって行われる。小祢里において大人たちは、祢里係以外ではあくまでサポートに徹すると

いう。時期は9月中旬の土曜から日曜までで、稽古は中学生の場合8月初旬から、小学生の場合8月中旬から始まる。稽古は週5回程度で1日2時間くらいあるが、それ以外の時間でも小祢里の準備は進められる。名称の通り、大祭のときに使われるものより若干小さい祢里を曳くこの祭りは、子どもが主体的にやっているという点で他の地域には滅多にない文化であると、誇らしく思っている人も町には多い。

その理由の一つだといえるのが、町の人からは「縦の関係」と表現されている小祢里から生まれる子どもたちの独特な人間関係である。「上下の関係」とも表現されるこの概念は、小学生から中学生までの、幅広い年齢の子どもたちの間の、厳しい序列のないフレンドリーな関係を指すものである。学年や年齢によって明確に区別されることが多い学校での人間関係とは対比的であるといえるだろう。このように、ここでいう「縦の関係」とは日本社会の一般的な特徴といわれている「タテ社会」（中根 1967）とは異なる概念で、年齢による厳しい序列が見られない点ではむしろ反対の性質を持つ特殊なものである。

横須賀に住むC氏（女性、60代）によると、このような「縦の関係」が、横須賀の子どもが他とは違う点であり、他の町からも羨ましく思われているという。また前述したB氏は、こうした「縦の関係」が子育てにおける横須賀のいいところであるが、同時によくないところかもしれないと語る。その理由は、一般的な先輩・後輩のような序列関係を学校に行ってから学ぶことが多いからということだった。このように横須賀には、小祢里の過程で生まれる子どもの人間関係が、横須賀の子どもの重要な特徴であるという共通認識があるといえるだろう。

小祢里から生まれるもう一つの特徴は、他の町からやってくる「助っ人」との人間関係である。少子化によって横須賀に子どもが少なくなったため、他の町や地域から子どもたちが参加するようになった。小祢里に参加する子どもたちは年齢を超えた人間関係だけではなく、地域を超えた人間関係も経験することになったのである。実際に横須賀小学校の児童たちから話を聞いてみたところ、稽古で地域外の知り合いができることは珍しいことではないという。

このように横須賀の小祢里は、祭りという文化を子どもたちに継承させ新世代の祭りの担い手を育てる教育的機能を持つと同時に、横須賀独特の子どもの社会関係を形づくっていると考えられる。

### 3 時代とともに変わる子どもの世界

第2節では子どもの視点から見た横須賀の文化について述べた。しかしながら、横須賀に住むD氏（女性、60代）もいうように、本来横須賀は閉鎖的な町ではなく、むしろ地域の中心地で、外部から人が集まってきたところである。そのため、横須賀はいつも地域外の影響や社会の全般的な流れによって絶え間なく変化してきたといえるだろう。もちろん、横須賀の子どもたちが生きている世界も同様である。ここでは戦後や高度経済成長期、ま

たはその後の時代の変化によって変わった、子どもに関わる文化や人間関係、そして親たちの子ども観について述べたいと思う。

### 3.1 小祢里の変化

前述したように子どもの人間関係を形成しているとされている小祢里だが、中にはそれが「昔と変わってしまった」という声もあった。まず時代による小祢里の変転の歴史について簡略に述べたいと思う。少祢里はもともと、それぞれの町で場所も時期もバラバラでやっていたという。それが昭和40年代から学校や警察などの要請により祭礼日が統一され、1972（昭和47）年には総社と三熊野神社の境内を借りて大祭とほとんど同じように行われるようになる。その後、西大淵と南審町が加わって規模がより大きくなった。

E氏（男性、60代）はこうした変化に対し、小祢里は昔のように各自治体でやったほうが良いと話す。そうするとみんなで参加できるけど、今は観光化してしまい、子どもだけが「義務的な関係」で参加しているということであった。規模が大きくなるにつれ小祢里はより厳格な「子どもたちの祭り」になったため、周りの大人たちはより関わりづらくなったのである。そして互いに日常的な接点を持たない外部からの「助っ人」が増えたため、子ども同士の「縦の関係」も弱くなってしまったと考えられる。実際に町の人から話を聞いてみたところ、昔は稽古のメンバーが稽古以外の親睦の時間を持つことがよくあったが、今ではあまり見ないという。また横須賀小学校の児童たちからは、稽古で知り合った中学生たちと祭りと関係ないことで何かをすることはあまりないという話もあった。

一つに統一され、規模も大きくなったことによって小祢里はその観光的な価値を高め、子どもたちは外部の人との人間関係を体験する機会を得たといえる。しかしその一方で、その変化によって形成される人間関係の在り方は変わってしまったと思う人もいるのである。

### 3.2 移りゆく継承の担い手

小祢里の人間関係と同じように、子どもに横須賀の文化を伝える主体も変わってきたことがわかった。日本では近代化および核家族化によって、家庭における教育力が弱まったといわれているが、横須賀でも同様の現象が見られたのである。子どもたちに横須賀の文化を誰が、どのように伝えているのかに焦点を当てて調べたところ、今ではそれが家庭ではほとんどないことがわかった。B氏は、「最近では核家族が多いので横須賀にある古い話のようなものが伝わっていないのかもしれない」と話す。F氏（女性、90代）は、今はテレビなど孫にとって他に面白いことが多いので、ほとんど会話がないう。また2人の小学生の子どもがいるG氏（女性、40代）からは、家族の余暇時間には、たとえば清水邸庭園のような場所は「地元だから」むしろあまり行かないという話を聞くことができた。このように今では家庭内で地域の文化が伝わることは減ってしまったが、代わりにその機能を果たしているのが学校のような行政の教育機関と、遠州横須賀倶楽部のような地域の団体

である。調査の結果、横須賀において両者は密な連携をとりながら子どもに横須賀の文化を伝えていることがわかった。

前出の横山氏によると、学校で決めた年間計画の中に総合学習時間という授業枠が 75 時間あり、その中で地域教育が 40 時間ほどあるという。その時間では子どもが自分でテーマを決めて横須賀を調査したり、町の人を呼んで子どもに横須賀の文化について教えたりしているということだった。また、授業枠以外での地域教育の例として、町の保存会と連携して行っているイベントが挙げられる。3 月 10 日（さとうの日）に横須賀小学校と隣の大淵小学校の卒業生たちに地元産の砂糖よこすかしろ（川合の章を参照）を贈り、それについて教えるこのイベントは、2011（平成 23）年から始まり今となっては恒例の行事になっている。

子どもに横須賀にある文化について教えるこうした教育の効果は、フィールドワークの中でも実際に確認することができた。横須賀で創業 80 年に近い麩菓子屋を営んでいる栗山清氏（男性、60 代）の妻である栗山てる代氏（女性、60 代）は、小学校の体験授業に子どもたちが来てから、子どもが親を連れてくるなどして、店の人気が上がったと語る。そして子どもによって麩菓子屋に連れて行かれた親のように、親が学校で学んだ子どもから横須賀の文化を知ること珍しいことではない。B 氏の息子（中学 1 年生）は、横須賀の文化に非常に強い関心を持っており、学校で学んだり自ら図書館などで調べたりしているという。そのため「親よりも横須賀の文化について詳しいので、逆に子どもから横須賀の文化を知ることもある」と B 氏は語る。G 氏も同じく、学校が教えてくれるので親が子どもに教えてもらうことがあるかもしれないという。学校が地域の共同体によって支えられていると上で述べたが、このように実は学校もまた、横須賀の文化を支えているのである。

### 3.3 今、子どもに求められているもの

第 1 節でも述べたように、親は「自分の子どもはこういう人に育って欲しい」という各々の理想を持っており、子どもたちのパーソナリティも多かれ少なかれその影響を受ける。そしてその親たちのゴールもまた、時代によって変わってきたのである。中でも今日顕著に求められていると思われるのが、子どもの主体性と多様性である。

桜井智恵子・堀智晴によると、今日の子どもの観には、今の子どもたちには自分で考えたり何かを自分で判断して行動したりする機会をもっと与えるべきと考える、子どもの主体性を重要視する傾向がますます強まっていて、大人自身は自分の欲求や権利や関心を放棄し、遠慮することが求められている（桜井・堀 1996）。それは横須賀も例外ではなく、実際に子どもたちの親である住民の数人に話を聞いたところ、同じく子どもの主体性を重んじる傾向が見られた。「子どもがどのような人になってほしいか」という質問に対し、「自分がやりたいことを自分で見つけるようになってほしい」という答えがもっとも多く、また「子どもが大人になっても地元に残ってほしいか」という質問に対しても、「特にこだ

わりはない」という答えがほとんどで、それは子どもが自分で決めるべき問題だという認識があることがうかがえた。

子どもの主体性を重視する傾向は郷土教育や地域教育とも関係が深い。その傾向は1930年代の郷土教育運動に顕著にあらわれていて（深谷 2015）、それは今の地域教育にも残っているのである。横須賀においても、前述したように横須賀小学校の地域教育では小学生に自分でテーマを決めて調べさせるという指導をしていた。

子どもの主体性からは、自然に多様性が生まれる。誰かによって決められるのではなく、自分の興味によって自分の行動を決めるので、子どもたちの知識や生活様式も個人の個性や興味によって多様になるのである。今回の調査で私は、横須賀の文化について子どもたちがどれくらい知っているのか、その知識の程度を調べてみた。その結果、祭り以外の文化に関する知識については予想よりも大きい個人差があることがわかった。たとえば現在中学1年生であるB氏の息子は、前述した通り大人でも知っている人が少ない文化についても詳しい知識を持っており、また大祭や小祢里の稽古の時期ではなかったにも関わらず、自ら望んで大人から囃子を習っていた。一方、今回の調査で話を聞くことができた横須賀小学校の小学生たちは、祭りが大好きで稽古にも参加していたが、祭り以外の文化についてはほとんどが学校で教えてもらった内容を知っている程度であった。また子どもによっては横須賀の文化にそれほど関心がなく、学校の地域教育の内容さえもあまり覚えてない場合もあった。稽古に関しては、公民館や町の稽古場で囃子を定期的に習っている子どももいれば、祭りの稽古時期以外はほとんどしない子どももいた。加えて、大人になったらどこに住みたいという質問に対しては、ずっとここに住みたいという回答がもっとも多かったけれども、一方で東京に行きたい子どもや外に行ってからまたここに帰りたいたいという子どももいるなど、全員で共通している考えはないことがわかった。

このように横須賀でも、親たちには子どもが自分で考え自分の行動を決めるという主体性を重んじる傾向があり、子どもたちの知識、生活、そして価値観などには多様性が見られると考えられる。

#### 4 子どもたちに「横須賀」を残すために

第2節では子どもの人格と人間関係を形成するものとしての横須賀の文化について、そして第3節では時代によって変わっていった子どもたちの世界や親たちが持つ子ども観について述べた。以上の内容からうかがえるように、第1節で述べた仮説通り、横須賀に存在する文化や人間関係の在り方は子どもの人格の形成に貢献していて、またそこから「横須賀の子ども」の個性が生まれていると思われる。子どもの発達に対し親が考えるゴールに関しては、日本社会の全体的な風潮と同じく、子どもの主体性と多様性を重視する傾向があり、それは今の横須賀の子どもたちも確かにその影響を受けているといえる。最後に



以上のような文化や環境を生きている今の横須賀の子どもたちに、横須賀の文化を継承するためには何が必要かということについて考察してみたいと思う。

子どもへの文化の継承において私がもっとも重要であると考えるのは、文化が子どもの日常の中に溶け込んでいるかどうかということである。今の子どもの生活や日常というものは、前述したように多様化しているが、家庭と学校という場所が大部分を占めていることは共通しているといえるだろう。一方で、第3節2項で述べたように家庭内で地域文化が継承されることは少なくなった。学校には地域教育があるし、それはある程度効果を出しているが、日常的といえるほど頻繁かつ自然に行われているものとは言い難い。今日において、子どもへの地域文化の継承が難しくなっている原因はここに求められるのではないだろうか。

文化の継承における日常性が如何に重要であるかは横須賀という事例にもよくあらわれている。横須賀は祭りを中心に回っている。いわば祭りが日常に溶け込んでいる町なのである。それ以外で子どもの日常に祭りほど深く関わっている地域文化はあまり見られない。一時的なイベントや体験教育で接することはあっても、自然で持続的な関わりを祭り以外の地域文化と持つことは少ないのである。横須賀の子どもほとんどが祭りに対しては共通して強い興味を持っていた一方、他の地域文化についての知識や関心にはだいぶバラつきがあったのはこうした日常性の違いで説明できる、と私は考える。小柰里から生まれる人間関係に関しても同様に、祭りの規模が大きくなって子どもの日常からは離れてしまったために弱くなったのだといえるかもしれない。

それでは地域の文化を子どもたちの日常に溶け込ませるためには何が必要になるだろうか。第3節3項でも述べたように、今日の子どもの生活は多様化していて、しかもその様式は大人によって決められるというよりは、子ども自身の関心によって決まることが多くなっている。いわば子どもが自分の日常とそれに関わる文化を選ぶ時代なのである。このことを考慮すると、子どもたちに押し付けるよりは、むしろ子どもの方から自発的に関わることを前提とした方法が必要になる。

その方法を考えるためには、今の子どもたちの興味・関心や価値観について知ることが重要である。それらもまた多様化しつつあるが、共通していえると思うのは、文化そのものが持っている魅力を重視する傾向があるということである。今日の子どもの文化が誰のものか、どこの地域のものか、もしくはその文化が歩んできた歴史についてはそれほど関心を示さない。たとえば横須賀の大祭や小柰里には外部から多くの子どもが参加しているが、その子どもたちにとって重要なのは祭りがどれくらい楽しいかであって、その祭りがどこの祭りかではない。横須賀内部の子どもたちにも同じことがいえる。調査で話を聞くことができた子どもは全員祭りに積極的に参加していたが、その理由の中に「横須賀の文化だから」というものはなかったのである。

以上の考察を踏まえた上で私の結論を要約すると、子どもたちに地域文化を継承させるためには、たとえば「地元のものだから」との理由で子どもを説得するなど、その文化が

持つ周辺の属性に依存するのではなく、より文化そのものが持つ魅力に注目しそれによって文化が子どもの日常に自然に溶け込めるようにすべきだということである。

#### 参考文献

小林修典

1999 『母親たちにとっての「すなお」な子ども像』小林修典編『人間発達と教育—民族誌学的観点』大学出版教育。

桜井智恵子・堀智晴

1996 『子ども政策にみる「主体性」』『大阪市立大学生活科学部紀要』44: 203-210。

中根千枝

1967 『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社。

深谷圭佑

2015 「1930年代における郷土科カリキュラム構成原理に関する研究—刈谷町立亀城尋常高等小学校における郷土科カリキュラムの事例を中心に」『現代教育学部紀要』7: 35-43。

Robert A. Levine

1996 「文化の属性—民族誌的見解」小林修典編・訳『文化と人間発達』大学教育出版。

1990 “*Enculturation: A Biosocial Perspective on the Development of Self*” Chicago: The University of Chicago Press.

White, M. and Levine, R.

1986 What is an *ii ko* (good children)? In H. Stevenson, H. Azuma & K. Hakuta eds., *Child Development and Education in Japan*. New York: Free Press.